

編集後記

- ◇ 本誌160号では、3月15日に開催した「令和5年度いも類講演会」の内容を特集として寄稿いただいた。新品種の育成・普及の鍵となる技術開発の状況ということで、ジャガイモについてはAIによる種芋生産の省力化・効率化と「新じゃが」の起点となる鹿児島県でのPCN抵抗品種の開発・普及の2課題。サツマイモについては民間企業による品種育成の先端を走るカネコ種苗の取り組みを収録している。なお、サトイモに関する講演の内容については、既に158号に収録しているので参照されたい。
- ◇ 今回のいも類講演会は、新型コロナの感染防止のために中止を余儀なくされた2年間とその後のオンラインのみでの2年の開催を経て5年ぶりのリアル開催となった。Zoomウェビナーとのハイブリッドで開催した結果、北海道から鹿児島まで200名以上の方に参加いただき、感謝申し上げる次第である。ただ、ハイブリッドでの運営には、事務局も不慣れなうえに会場のネット環境も十分でなかったことから、今後、運営のロジを含めて改善を図っていきたい。
- ◇ 我が家の菜園では、昨年に続いて早期培土方式の効果確認に取り組んでいる。1月に種芋のレパートリーの多い大手のホームセンターに足を伸ばして、標準品種の「男爵薯」「メイクイン」の他に、「はるか」「きたかむい」「とうや」「アンデス赤」「インカのめざめ」をゲット。2月中旬に種芋を植え、桜の開花と同時に萌芽、5月末の現在、品種によっては枯凋の兆しが見えている。現在、関東まで北上してきたジャガイモ収穫前線の中で、どの程度の収穫が得られるのか、楽しみにしている。
- ◇ 一方、自宅の庭では4月にコンニャク芋が開花した。最初は妙に早い萌芽だと訝しく眺めていたのだが、仏炎苞と呼ばれる独特の形を示すに至り、ようやく花であることに気付いた。花が咲くのは4年芋以上とのことで、生擦りコンニャクに取り組むのをサボってきたことが怪我の功名となった。我が国においてコンニャク芋の生産は9割以上を群馬県が占めているが、全国各地で地域特産作物としての栽培、伝統食品としてのコンニャク生産が引き継がれており、食文化として貴重な存在である。次号では、このようなコンニャクの世界も紹介したい。

いも類振興情報 第160号

2024(令和6)年7月15日発行

定価 1部 500円
年間購読料(季刊) 2,000円

発行 一般財団法人 いも類振興会

〒107-0052 東京都港区赤坂6-10-41 ヴィップ赤坂303
TEL 03-3588-1040 FAX 03-3588-1225

E-mail: jrta@imoshin.or.jp
郵便振替 00130-1-110152

印刷 株式会社丸井工文社